

二松學舎大学人文学会第一〇一回大会 講演題目・研究発表要旨

日時 平成二十二年六月十九日(土)  
場所 二松學舎大学九段校舎二〇一教室

講演

スポーツビジネスと

その増幅装置としてのメディア

江戸川大学社会学部教授

福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役

小林 至

研究発表

『学則』における荻生徂徠の日本的な学問観

博士後期課程二年 孟 峰

江戸儒学の頂点に立つ荻生徂徠が当時の学問界に大きな影響力を持ったのは、やはり彼の学問の方法論としての古文辞学においては他にないであろう。徂徠、六十二歳の時に公刊された『徂徠先生学則』には彼の学問の方法論が最も端的に語られている。

魯迅と三十年代左翼文学運動

—魯迅と「左聯」と「国防文学論争」—

博士後期課程三年 李 選

道徳修養を第一義とし、それを大前提として治国安民を目指すべきとする(「修己治人」)のが学問であるというのが古来の通念であった。ところが、徂徠は「修己」と「治知」とを即座には連続させなかった。彼は儒学を道徳修養とは無縁な、治国安民のために政治と文芸の「術」を習得する学問と捉えた。このような儒学思想の改変は中国・朝鮮では見られなかったものであり、異彩を放つものであるとされる。

そこで、本論では『学則』を中心に徂徠における学問観を考察し、それを通してその日本の特性を考察したい。

一九三〇年に成立した中国左翼作家連盟(左聯)は党員文学者と党外文学者が「大同団結」の下で結成した文学者の組織である。故に左聯の中に二つのグループがあった。つまり左聯の共産党員グループと魯迅を中心とする文学者グループである。一九三四年末から党員グループからの「冷箭」(裏での批判)を受けた魯迅は彼ら

に対して不信感を抱いていた。「国防文学論争」の際に、魯迅はあ  
る文章で、党员グループ側を痛烈に批判していたので、両者の矛盾  
は表面化していた。

今まで、毛沢東の評価に従って、魯迅を左聯の「指導者」とした  
認識が普通である。それに、「国防文学論争」の二つのスローガン  
は毛沢東路線と王明路線の表れとした研究もある。確かに、三十年  
代に魯迅の力によって沢山の左翼文学雑誌が作られていて、左翼文  
学における魯迅の貢献は大きいと言える。しかし、左聯の本当の指  
導権は党员グループ側にあった。その上三四年から魯迅は左聯との  
関係を維持できなくなった。本研究においては、魯迅が左聯に加入  
する背景を検討した上で、左聯における魯迅の本当の役割を明らか  
にしたい。さらに、「国防文学論争」の二つのスローガンの出所を  
検証し、魯迅と「国防文学論争」との関係をも合わせて検討したい。